

地域教育情報紙

山梨県教育委員会 中北教育事務所

中北.com

〒400-0001 韮崎市本町4-2-4

TEL 0551-23-3046

6

中北地区の地域社会 (COMmunity) の心の交流 (COMmunication) をめざします

能登半島地震によせて

2024年、元旦早々に能登半島地震の発生、続いて2日には羽田空港滑走路での航空機接触事故が起き、重い空気で始まりました。お亡くなりになられた方のご冥福をお祈りすると共に、少しでも早い復旧を祈るばかりです。中北地区でも甲斐市の日本航空高校で石川キャンパスの生徒が活動するというニュースがありました。



令和6年能登半島地震 地震の発生は1月1日午後4時10分ごろ。突然能登半島の日常生活を切り裂きました。最大震度7の揺れで多くの建物に倒壊するなどの被害が出ました。約1ヶ月が経過した時点で、犠牲になられた方々は240名を超え、道路・水道管など、インフラの復旧は遅れ、避難生活を余儀なくされている方の生活再建の見通しはたてられない状況が続いています。

●教育者として手を差し伸べられること

さて、今回なぜこの話題を取り上げたのか。石川県教育委員会から生徒の学習指導等にかかる業務に対応するための教職員の派遣要請があり、それに応じ文部科学省が「令和6年能登半島地震の被害に伴う人的支援について」として全国に募集をかけました。中学生の集団避難がニュースで報じられましたが、その生徒達です。そうして、このような中、2/13(火)～16(金)の派遣期間に選ばれた一人として本教育事務所 指導主事 内藤 共哉 先生が、中学生のために参加してきました。体験を聞いてみました。

●インタビュー

Q(質問)：お疲れ様でした。被災地での勤務です。心配もありました。戻られた今の率直な感想は？

A(内藤先生)：期待され、緊張感は半端なかったのですが、無事に家族の元に帰ってこられて良かったです。

Q：避難してきている生徒の様子はどうでしたか、確か受検生で、その点も大変でしたよね。

A：表面上は明るく振る舞っている印象を受けました。人懐っこい生徒が多く、突然行った私たちを受け入れてくれた感じは強かったです。施設では生活と学習の場に明確な境目がなく、色々と切り替えが出来ない生徒も若干見受けられました。(派遣先は石川県立白山青年の家)このような条件の悪い中でも、受験のため就寝時間までしっかり取り組む者も増えていましたね。

Q：派遣先でどのような思いを持ち取り組まれていましたか？

A：施設は輪島中3年生が中心だったのですが、現地の先生方自身も二次避難しているので、なるべく負担をかけず、心身の疲労やストレスがかからないよう配慮しました。気づいたことや、言いにくいことは「こんな風にやってみましょうか」などと提案し、こちらでできる指導・支援を積極的に行い、話し合いも密に持つよう心掛けました。生徒には、学習の場以外でも寄り添い、積極的に触れ合うことで「応援している」というメッセージを送り続けるよう努めました。

Q：本当に大変な任務ご苦労様でした。最後に何か一言！

A：外から見ていたものと実際に中に入って感じたことは違うことも多かったです。今回の体験は、被災地支援の実態を知る貴重な機会となりました。同時に被災地での本当に必要な支援は何なのかをつきつけられ、考えずにはいられない日々でした。



座っている生徒達に指導をする内藤先生



中北地区地域教育推進連絡協議会（会長 輿水 清司 北杜市教育委員会教育長）は1月25日に敷島総合文化会館で2回目の研修会を行いました。幼保連携型認定こども園 和泉愛児園 梶原 智子さん、保坂 訓加さんからの実践発表、峡東保健福祉事務所 芦沢 茂喜さんによるひきこもりについての講演でした。

実践発表 「お蚕さんが紡ぐ 子供の好奇心・探究心・社会性」

和泉愛児園 園長 梶原 智子さん 主幹保育教諭 保坂 訓加さん

和泉愛児園さんの取組は本誌2号で紹介済み。その縁で発表頂くことに。今回の発表も、お蚕さんへの情熱、それを通じて見えてくる自然への敬意、子どもに対する愛が溢れています。梶原園長の園の説明で、社会福祉法人としての活動を含め12年間にわたる子ども達へのサポートや、園児に対する職員数の多さに驚かされました。プレゼンにも相当な手間がかかっています。何事も正面に据える園の姿勢が垣間見える発表でした。



～アンケートから～（一部を略してある場合があります）

- 子供にやらせるという考え方でなくお2人が自ら楽しんでいらっしゃる。その姿勢がとても素晴らしいと思いました。保護者もお子さんも、楽しみながら働く先生方に囲まれてお幸せだと思います。
- 蚕を通して、様々な経験・思いを抱き、感性を育むプロセスが伝わってきました。いかに子ども達が“自然”と関われるか、環境を作っていくか。大変参考になりました。
- 実践発表には、大きな共感を頂きました。今、学校現場も社会もICT化が進み、自然から離れ、子どもの遊びもバーチャル化しています。これでは感性は育たず豊かな心の育成も望めません。幼い頃から土に触れ、生き物と触れ合うことで“思いやり”の心も育つのだと思います。

講演 「親子の関係から考える、こどものミカタ」

峡東保健福祉事務所 精神福祉相談員 芦沢茂喜さん

その語り口は朴訥に感じますが、内容はユーモアや優しさに溢れています。ご自身の失敗経験を生かし、その後の数多くの経験から裏打ちされた引きこもりへのアプローチ。また、親の思いと子の思いの違いからくる親子関係の難しさ、「いつまで親なのでしょうか」の問いかけには思わず考えさせられずにはられません。質疑応答時の保護者からの感想で（大変な勇気を出しての発言と察します）、「普段相談している方と同じ内容の話で安心しました」というものがあり、芦沢さんの回答も熱意に満ちておりました。多忙な中、相当な無理を押して芦沢さんに来てもらえて本当に良かったな、としみじみと感じられました。



～アンケートから～（一部を略してある場合があります）

- 「不登校の話をするほど、不登校は続く」「答えを持たず、そのまま聞く」「一緒に考えよう」「問題ばかりを見ていて、子どもを見ていない」「支援者臭を消す」沢山心に残るフレーズをいただいた。
- 子どもや家族に向かう、支える側のスタンスは本当に難しいです。「～すべき」「普通は～」に、誰もが陥るのだと感じました。“幸せに生きる”方向は様々あって、いつかそれを見つけて自分で選べるようになればいいと考えるようになり、少し向き合い方が楽になりました。
- 人との関わりを考えることができた。普通という不確実な言葉で互いの誤解が生じることを確認できた。不登校は、相手を理解することではないような気がした。一定の距離を保ちながら、つかず離れずゆったりとした気持ちでかかわるようにしたらいいのかなと感じた。強制せず、押しつけずやっていきたい。
- “人の話を聞くうえで大事なことは、答えを持たずそのまま聞く”。これはとても難しいことだと思いますが納得しました。単純に聞くってことが大切だなとわかりました。どうしても答えを求めていたり、決めてしまったりしている（無意識の中で）なあと感じました。子どもたちと関わる上で、素直に聞くことを意識していきたいと思いました。日常生活でもできることなので、取り組んでいきたいです。

山梨ことぶき勸学院活動実践発表会が、1月26日、県立文学館で開催されました。県内各教室の学生が一堂に会し、研究成果を発表する場となっています。当日は寒さ厳しい中、多くの皆さんが集まりました。



各教室とも趣向を凝らしています。縄文遺跡、武田家にまつわる旧跡の調査、西嶋和紙、郡内地方の発展に貢献した人々、カルタづくりと通じて地域を探る、といったバラエティに富む内容。しかも各発表とも必ず現地調査を交え、プレゼンも動画を挿入したりと、かけられた時間と工夫と熱量が十二分に伝わって来ました。

中北教室は「徳島せぎの歴史と現状」と題して発表。国の登録記念物に指定され、日本三大堰の一つである徳島堰（他は柳川堰、箱根堰）について、調査とそのまとめを発表しました。班ごとに分野を分担して現地を見学し、図書館やHPなどで文献調査も行い、350年前に端を発する堰の歴史、文化財、構造物、経済発展について、とても奥深く興味深いことを分かり易く発表。甲府盆地西部の経済発展に大きく寄与し、現在もなお多くの経済効果をもたらしていることを解き明かしました。何度も練習をかさね、発表当日を迎えました。仲間との絆を深め、「情熱を持って調べると新しい発見がある。」とますます地域を熱く想う発表会となりました。



#中北バトン

様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。今回は、甲斐警察署生活安全課の名取晃生さんです。

SNSの脅威から子供達を守るために

甲斐警察署 生活安全課 少年係 係長 名取晃生

甲斐警察署生活安全課は2つの係で構成されており、各種防犯団体と連携して高齢者をねらった詐欺事件や街頭犯罪の防止に取り組んでいる生活安全係、そして市・児童相談所と連携し児童虐待や家出等の問題を抱えている少年への対応、学校と連携していじめ事件等の対応をしている少年係があります。

近年の少年にかかわる相談や事件において、SNSをきっかけとしたものが増えてきています。文字だけではニュアンスが伝わらず学校内でのいじめの原因になったり、女子生徒が元交際相手やSNSで知り合った相手に画像を送ってトラブルに巻き込まれたり、非行が進んだ子では、SNSで知り合った年上の人に誘われて暴走族に加入したり、闇バイトをして県外の警察から逮捕されるような事件も起こっています。甲斐警察署では、こういったトラブルに巻き込まれないよう、小学校に対しては「防犯教室」中学校や高校に対しては「非行防止教室」として出前授業を行い、各年代に応じた内容の講義をさせて頂いています。

警察といえば、「悪いことをした犯人を捕まえる」というイメージが強いと思いますが、これまで話したとおり、犯罪に巻き込まれないようにする、犯罪を未然に防止する、といった防犯活動も、近年警察がより一層力を入れている活動と言えます。

そのためにも、犯罪になってから警察に届出するのではなく、是非早めに警察への相談をお願いします。



1月12日に甲府市総合市民会館芸術ホールで、県内の小学生（保護者同伴）、中学生、高校生、大学生を対象にし、鍵盤エミュポップバンド マルシーボク のライブコンサートが行われました。主催はなんと山梨県ボランティア協会（田辺 光正 会長）なのです。どのような意図があるのでしょうか。

ONE TO ALL 『ひとつの思いから全てが始まる』（本事業のテーマです）

LIVEの開場直前の打合せで、今回のイベントを仕切る土屋 茂さん（山梨県ボランティアNPOセンター長）からの言葉が印象的でした。「今回、始まらないと（会場の動員数は）わかりません。ただ、様々な人が来場するはずなので、つながりをつくりたいのです。施設のあちこちにQRコードを貼り付けてます。スマホをかざすよう積極的に案内して下さい。」ボランティアのスタッフは大人もいますが、高校生・大学生も多数参加しており、多様さに少し驚きです。それぞれの役割分担を確認し、開場に備えました。会場の外には、説明にあったQRコードと共に、子ども達が気持ちを共有できるようなボードも設置され、様々な工夫がみられます。



イベントの意味は？

「イベントそのものが成功する、しないではなく、つながりをつくりたいのです。今回はつながりをつくるための大きな試みの一つで、やることに意味があるのです。」（土屋さん）土屋さんは子ども食堂を全県下で展開しているのですが、まだまだ困難な状況を抱えている子ども達に救いの手がのびていないと実感されています。子ども達の居場所づくりや、良い情報を提供するために若者を集める何か良い手段はないか、と仲間と悩みました。その中で、アンケート結果等でライブなら若者が集まりやすいという意見を多数受け、甲府市総合市民会館をはじめ様々な機関の協力を得てようやくこのイベントが実現したのです。有料チ



ケット数は確認しているのですが、対象者には学校や各ボランティア団体を通じてチラシ配布をしたうえで無料なので、文字通りどのくらい来場してもらえるのか未知数だったのです。しかし、当日は親子連れや、中高生のグループも次々来場し、今回の目的である『インフォメーションバッグ』（写真の子どもが持つ黒いバッグです）を手渡すことが出来ました。バッグには様々な情報を入れ、困った時の相談窓口を伝えることにより犯罪被害の未然防止につなげる狙いがあります。このバッグを手渡すことが目的なのです。

イベントには様々な要素が…

田辺会長に「昨年の7月頃から多くの若者を集めるイベントを模索していました。やはり、1つの力で何かすることには限界があります。特に若者がボランティアのような活動に参加するには、社会貢献といった言葉よりかは、いかに共感できるかが大切となっています。入り口はそこで、きっかけさえあればそれぞれの想いで驚くような協力をしてくれることもあります。そのきっかけづくりのために、このような多くの人が集まるイベントはとても重要なのです。そうして、多様な主体が協力することにより不可能が可能となることで、様々な子どもや若者を応援したいのです。」と少し違った角度からも興味深い話をいただきました。



子どもの居場所づくりとライブコンサート。この意外な組み合わせは多くの人の想いが凝縮されたものでした。今後も様々な広がりやボランティアの奥深さを感じさせてくれるイベントでした。

ONE TO ALL公式LINE QRコード

今年度も「中北.com」を、ご覧いただきありがとうございました。

「毎回楽しみにしています。」との話も聞き、取材の甲斐があったとうれしく思うこともありました。

ご意見・ご要望は励みになります。取材依頼も、引き続きお待ちしております。

これからも、横のつながりを広げられる地域教育情報紙「中北.com」に御期待ください。

令和5年度『中北.com』 編集・発行 中北教育事務所 地域教育担当：内藤賢・市川哲也